



パンダリーカ

びやくれんげ
—白蓮華—



何がめでたいことか

本願寺派 布教使 藤澤 量正

ところで私たちは、新年を迎えるところで「おめでとう」と祝詞を交わします。苦悩の尽きることはない人生に在つて、何が本当にめでたいことなのか、それを考えてみることも大事なことであろうと思うのです。

本来「めでたい」ということばは、物事が望ましい状態に在るとき用いられます。したがって、喜んだり、祝うに値すると思われるときに使用されるもので、悲しみや苦しみを抱いている人などには、このことばを用いないのが常識です。然るに親鸞聖人は、明法房が往生の本意をとげたとの知らせを受けたそのご返事には、「めでたきことにて候へ」と述べておられます。また、ひらつかの入道という者が往生したと聞かれたときも、「めでた

さ申しつくすべく候はず」と書いておられるのです。これは、一般の常識と異なつて、往生こそ「めでたきこと」と語られたのであります。

さらに聖人は、『御消息』のなかで、南無阿弥陀仏にあひまゐらせたまふこそ、ありがたくめでたく候ふ御果報にては候ふなれ

と述べられて、何よりも南無阿弥陀仏に遇うことこそが「めでたいこと」とされたのです。したがって、お念仏を申すことについても、

ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候ふなり

と述べられて、めでたい人生とは、お念仏を申し、浄土に往生する身になることであると明らかにされたのです。

この「めでたい」ということばは、「芽出たい」と書く場合が多いようですが、この「芽」という字は、くさかんむりに「牙」という字であります。これは、

牙のような芽のすがたを型どつて、内に力をいっばいたぎらせ、これから大きく伸びようとしている生命の躍動を象徴しているのだとも言われています。「芽が出た」とか「芽出たい」と書くのは、喜びの芽生えを意味するものであるとするなら、お念仏が申さるる身になるということとは、芽の出る人生を持つということなのであります。（中略）

このたび私は、喉頭腫瘍によって声帯を切除し、遂に声を失いました。声に出してお念仏を相續することのできない悲しさとさびしさは拭うべくもありません。しかし、南無阿弥陀仏の大きなはたらきに遇わせていただいて、悲しみを超える力と、安らぎを得る道が何であるかを改めて思い知らされました。

私たちは、新しい年を迎えて、いつでも、どこでも、どんなときでも、つねに如来に喚びつづけられていることに思いを至し、芽の出るたしかかな人生を持ちたいものです。

『人間として』（本願寺津村別院）より引用
一部を中略してご紹介しています



「死」について

仏教学者 中村 元

生と死は裏腹のものです。つまり、生まれたということは同時に死ぬことをそこに内含しています。そして

また、死ぬということは生きていることをそこに含んでいる。死を問題にするときには、生きているわけですからね。瞬間、瞬間に、人が生き、また死んでいる。ですから、瞬間、瞬間に、人は生と死の両面に迫られているわけです。

ただ、人が死んだときに、第三者は、その人の生と死を客観的に見ることができません。外側から見ると、その人の生は死によって完結します。ですから「人の評価は棺を覆うて初めて解る」というようなことを申します。しかし、今ここで論議している私なら私という人間自身は、自分の生が死と裏腹だと

いうこと、裏には死が迫っているということを知りながらも、なかなか死を客観的なものとして評価することができないわけです。

死んだらどうなるのかということは、昔から哲学や宗教で論じられています。死んだという経験をもってこの世に戻って告げてくれた人はひとりもいません。死んで、すべてが消えるということも考えられますが、消えると断定する確実な根拠はなにもない。というのは、私どもがめいめい生きているということが、そもそもひとつの不思議だからです。なぜ生まれてきて、なぜいのちが続いているのか、誰も説明できないのです。

(中略) 死はどこまでもその人個人の事柄ですが、では、亡くなった人のために追善法要をするということはどうなのか。お葬式がそうですね。この頃は、お葬式というと仏教の専売特許みたいになつていますが、原始仏典を見ます

と、「お葬式などをやってなんの意味があるのか」というようなことを言っています。お葬式というのはバラモン教がやっていたのです。人が死んだからというので嘆き悲しみ、いろいろ儀式を行なうけれども、死んだ人はもう死んでしまったものだ。そのために儀式を行なうというのは、まるで池の中に石を投げ込むようなものだと言うわけです。その石が上がってくれるようにいくら祈願しても、石は上がってこない。それと同じように、死んだ人のために儀式をしたり祈つたりするのは無意味だと言うのです。

論理から言うとしたしかにそうなると思います。ただ、死んで法要をしたり、人が集まって儀式を行なうのは、その人を愛し尊んで、そのゆかりを尊重するということでもありますね。それは同時に、生きている人にとって大きな意味をもつ。ですから、そういう意味での葬儀なり追悼会などには意味があると、思います。

『人生を考える』(青土社)より引用

一部を中略してご紹介しています



衝撃

龍谷大学 名誉教授 石田 慶和

幼いころに心に受けた大きな

衝撃は、その人の人格形成に深い影
響を与えます。今度の阪神大震災

は、子供たちの心にどれほどの衝撃
を与えたことでしょうか。テレビのア

ナウンサーが、廃墟になった神戸の
町を「パーママー」と呼んでさまよう

ていた少年の姿が眼に焼き付いてい
ると言っていました。一瞬に両親を

亡くしてしまった少年の悲しみを癒
すものが果たしてあるのでしょうか。

地震や災害でなくても、子供た
ちの心に傷を残すことは、いくらで

もあります。可愛がってもらったお
じいちゃんやおばあちゃんが亡くな

るとか、小さい妹や弟が死んでしま
うとか、身近なものの不幸は、大

人たちの考える以上に子供たちに
衝撃を与えます。それまでの和や

かな毎日の生活中に、突然襲ってきた
理不尽な暴力―「生死無常」は子供

たちにはそうとしか思えないでしょう。
しかしそれは、人生の実相に気付く

大きなきっかけでもあります。すぐに
はそのことは理解できなくても、その

時に感じた悲しみは、心の底深くに沈
みこんでゆき、そしてそこから宗教的

な目覚めへとつながってゆくでしょう。
(中略) このままではいけないんじや

ないか、なにか大事なことがあるんじや
ないか、そうした思いが若い人をつきう

ごかすのは、幼いころから心の中にしま
いこまれていた、人生についての、生き

ていることについての疑問です。それな
しには、人は宗教的世界へ入れないの

ではないでしょうか。
子供たちを厳しい現実から守ってやり

たい、なるべくつらいことや悲しいこと
に会わせたくない、というのは、おと

なたちの共通の思いです。しかし、時

として襲いかかる「生死無常」の事実
はどうしようもありません。そのとき、しつ

かり子供たちをだきしめてやると同時
に、どんなに悲しくてもその事実に向

して乗り越えてゆく勇気を教えてやら
なければなりません。そうするため

は、まず私たち自身が本当に宗教的世
界に目覚めていなければならぬと思いま

す。
「天国はもう秋ですか、お父さん」

誰が言ったのか知りませんが、どこか
で読んだこの短い少年の言葉の中に、ど

れほど深い思いがこめられていること
でしょう。愛するお父さんを交通事故で

突然亡くした少年が、天国にいるお父
さんに呼びかけているのでしょうか。哀

切きわまりないこの言葉の中に、なにか
深い宗教的なものが含まれているように

も思えます。それが限りない慈悲の仏
さまへの思慕となつたとき、そこにひとつ

の宗教的な目覚めが実現するでしょう。

『念仏の信心』（本願寺出版社）より引用

一部を中略してご紹介しています



花まつり

中央仏教学院 元講師 黒田 覚忍

お釈迦さまは、いまから二千五百年ほど前の四月八日、インドのルンビニーの花園でお生まれになったと言われています。やがてお釈迦さまは、私たちに戦争のない平和なところがほんとうに大切であることを教えてくださったのです。

世界のあちこちで、いまも戦争が起こつています。戦争で亡くなったり、けがをして苦しんでいる子どもたちもたくさんいます。お釈迦さまのお誕生をお祝いし、お釈迦さまの教えを聞きましょう。

お釈迦さまがふるさとの近くの林においでになった、あるときのことです。釈迦族とコーリヤ族との間で水争いが起こりました。釈迦族の国とコーリヤ族の国との間に、ローヒーニー河が流れています。二つの国は、

その河から田畑に水を引いていました。

ところが夏のこと、日照りが続いて水不足になり、作物が萎れ始めました。このままほつておけば、田畑の作物は枯れてしまいます。農家の人たちは、水の少なくなった河の両岸に集まって、それぞれ相談しました。そのうちにコーリヤ族の男たちが、河の水を全部自分たちの方へ引こうとしました。釈迦族の男たちは、だまって見ているわけにいきません。こうして殴り合いが始まり、大乱闘になりました。やがて、それが戦争にまでなりかけました。

その様子をご覧になっていたお釈迦さまは、たいへん心配されました。そこで空中を飛んで、ローヒーニー河の上空に姿を現されました。

どちらの側も、お釈迦さまの姿を仰ぎ見ると、武器を捨てて礼拝しました。お釈迦さまは尋ねられました。

「王よ、水と人の命とどちらが大切か」

「水よりも人の命の方がはるかに大切でございます」

「その水のために大切な人の命を捨てるという事は、正しいことではない」

一同は黙つてしまいました。お釈迦さまはさらに言葉を続けておさとしになりました――

「汝たちはなぜこういうことをするのか。もし私がいなかったら今日この場で血の河が流されるところであった。汝たちのすることは間違つている。(中略) 恨みをいだくものの中にあつて、われわれは安らかに恨みなく生きてゆこう。恨みをいだく人人の中にあつて、われわれは恨みなく暮らそう」

お釈迦さまの教えを聞いてどちらの国も非を悟り、戦うのをやめたということです。

いつの時代でも、自分が正しい、自分さえよければいいというところが、争いを起こします。いまこそお釈迦さまの教えを思い出したいものです。



人と人とのつながりを大切に

本願寺派 勸学 林 智康

「人と人とのつながりを大切に」これは私の平成十年の年賀状冒頭の言葉です。現代において最も考慮すべきことは、「人と人とのつながり」、すなわち「人間関係」であろうと思います。

蓮如上人五百回遠忌法要を迎えるにあたって、「環境」と「家族」の問題が提示されました。初めの「環境問題」は、二十一世紀の人類の生存に大きな影響を及ぼすもので、環境庁は①地球の温暖化、②オゾン層破壊、③酸性雨、④森林の減少、⑤砂漠化、⑥生物多様性の減少、⑦海洋汚染、⑧有害廃棄物の越境移動、⑨途上国の公害など、九項目を出しています。どれをとり上げても、現代に生きる人間として避けて通

れない問題です。今や国を超え民族を超えて、人間のエゴイズム（利己主義）を捨て叡智を出し合って解決することが望まれます。昨年十二月に京都で開催された「地球温暖化防止会議」はまだ記憶に新しいところです。

また、後の「家族問題」は、核家族時代・少子化時代・長寿社会を迎え人間関係の希薄になった時代において、夫婦・親子・兄弟姉妹の家族関係の回復が急がれます。中学生による小学生殺傷事件をはじめ、一連の殺人・自殺・いじめ・暴力などの諸問題も、「いのち」の「もの」化への現象が根底にあります。そして、「家庭のない家族の時代」（小此木啓吾氏）と言われるなか、愛情の欠乏した名ばかりの家族ではなく、本来の家族をとりもどす方策が求められています。

「環境」と「家族」の問題は、私たちの「いのち」の上で深く結びついています。

そして、この「いのち」に対して、持ちつ持たれつの相依相関関係や尊厳性・平等性を説くのが、仏教の縁起の思想です。人間は、一人では生きられません。また、人間は人間の力だけでは生きられません。他の人間や、他の動植物・自然によつて生かされているのです。そのため、私たちは他者の存在を認め、共存・共生の考えを持つことが大切です。その上に念仏者は、阿弥陀さまを中心にした家族関係を築き、また環境問題にもできるところから取り組んでいきます。

『仏の願い』（探究社）より引用
この本は西照寺書庫にあります

※蓮如上人五百回遠忌法要は、平成十年（一九九八年）三月から十一月にかけて、八ヶ月を十期に分け、合計百日の間厳修されました。また、京都で開催された「地球温暖化防止会議」とは、平成九年（一九九七年）十二月に開かれたものです。その二つから二十五年以上経つ今もまだ、解決できていない問題ばかりではないでしょうか。 住職



調和のとれた世界

本願寺派 勸学 大田 利生

王家に生まれた釈尊が、飽食の

王宮生活に満足して生涯を送った

ならば、仏教は起こらなかつたら

うとは、ある仏教学者の言葉です。

二十九歳で決然として出家修行の

旅に出たのは、物質的欲望の充足の

中には、こころの貧困、渴きがとも

なっているとは知られたからである、

とも指摘されます。

つまり、物質的欲望の充足の裏に

は常に足りないものへの欲求、欲望

を満たそうとするこころの状態があ

るということです。

釈尊が、そのめぐまれた環境のな

かで出家されたというところに大き

な意味があったと言えるでしょう。

その環境とは、三時の宮殿があり、

ヤシヨダラ妃と結婚もされ、一子

ラーフラも誕生しています。そのよ

うな状況をいうのです。

多くの仏典に「少欲知足」という言

葉がみられます。

『仏説無量寿経』にも、菩薩の修行の

徳目の一つとして出てきますが、「(菩

薩の修行が) 私のための修行でありま

した」と味わえば、無関係ではあり

ません。『仏遺教経』には、「知足の

人は貧しいといえども、而も富めり、

不知足の者は常に五欲のために牽かれ

て知足の者のために憐愍される」とあ

ります。足るを知るということは、な

かなか容易ではありません。いつも五

欲(人間の認識の対象へ五境)に対し

ておこす欲)に動かされているからで

す。

私たちの欲望は限りなく膨らんでい

きます。

膨らむのが「仕方ない」ではなく、

やはり制御していこうという気持ちは

持たねばならないと思います。そのこ

とが人間関係を豊かにしていくことにつ

ながるからです。

そして、少欲知足のこころ、実践が広

がっていけば、調和のとれた家庭、社会

が実現していくことになるように思われ

ます。それは、知足の実践ということが、

他に対する思いやりへと広がっていくこと

になるからです。

浄土とは調和のとれた世界です。

浄土に吹く風を徳風、清風、微風と

も表現します。そして、風は寒からず、

暑からず、また、遅からず、疾からず、

と表わされています。清風が吹くとき

に五つの音が出て、その音があい和すと

説き示されています。少欲知足は、豊

かなこころ、安らかな境地へとつながつて

います。

花が散るのも雨と風、花が咲くのも雨

と風といえます。調和の世界をこの言葉

にも味わうことができます。

『泥の中に咲いた花』(本願寺出版社)より引用
この本は西照寺書庫にあります



法身の光輪きはもなし

本願寺派 勸学 相馬 一意

自坊での法要、特に、お葬儀の席での法話として、近年、還相というところをよく語っているように思います。

浄土真宗には、お浄土で安らかに、という考えはないといつてもよい。お浄土に生まれさとりを開かせていただいたからには、この娑婆世界に還つてきて、この世界で苦しむ人々を救う活動に従事するのである。そのように阿弥陀さまのお力で、仕向けられているのである。と。そして、浄土に往生して成仏させていただくということは、ブツダ（覚者）となつて活動をするというものであるから、骨身を惜しまず他人のために尽くす利他の活動に励むということなのだ、必ず付け加えてもいるのですが、なかなか理解されないでいます。苦勞ばつか

りのこの世の生を終えたのに、死んでも他人のために尽くすなんてまっぴらだ、といった顔に出会うことが多いようです。

しかし私は思うのです。親鸞聖人が「おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし」と『歎異抄』第四条におっしゃっています。この世に苦しみが充ち満ちていて、どれほど嘆き悩んでいる人がいようと、それを「思いのままに救いとげることにはきわめて難しい」のですから、ボランティア活動などがあり得るにしても、本当の利他行など不可能なことです。にもかかわらず、往生後のこと、仏から恵まれてのこととはいえ、それができるようになるというのです。何とすばらしいことでありましょう。

私利私欲の追求にのみ生きていったのは、それこそ申しわけがない。そう思うからこそ、人は、困難な業務に命の危険性があるところにも挑戦してゆくのでしよう。

私とてこういう気持ちに変わりはない。一つでも少しでも社会的に有意義なことをして、この人生を全うしたい、と念じています。けれども、我欲を捨てられない凡夫であることに相違はありません。自分勝手な行いをして、他人と行き違えばかりしています。（中略）

仏はいつも愛をもつて見守つてくださる。その愛に守られてこそ、不十分なこの私の僧侶としての活動が何とか辛くも維持され、人間としての正しい生き方などということに思いをはせることもできている。また、死して後の完成であるにしても、真実の利他行が可能な命を恵まれている。もつたいなく、そしてかたじけないことではありませんか。

『浄土真宗 やわらか法話3』（本願寺出版社）より引用

掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています



仏に成る人生を歩む

本願寺派 司教 高田 慈昭

『論註』に「恵蝓春秋を知らず」

という言葉があります。恵蝓とい

うのは蟬です。蟬は夏生まれで、

夏に鳴いて、夏に死んでいく。だか

ら春秋を知らない。夏の前に春が

あつた、夏の後に秋があることを知

らない。ということは、今が夏じゃ

ということもわからない。そうで

しょ。夏という概念がわかるのは、

春やら秋がわかるから夏という概

念がわかるわけなんです。夏しか

知らず、春も秋も知らないという

ことは、蟬は今が夏だということ

もわかつていないということになる。

夏が夏じゃということの意味がわか

るのは、春や秋と対照してわかる

わけなんです。

我々人間もそうです。この世にポツ

と気が付いたら人間に生まれていた。

生まれた以上は生きねばならん。生き

ねばならんから、働いて食べていかねば

ならない、この人生を一層楽しく平和に、

愉快に快適にするために働いて文明文化

が発達してきた。しかし生まれる前もわ

かつていない。「恵蝓春秋を知らず」、私

たちも蟬と一緒にですよ。気が付いたら

人間に生まれていた。人間に生まれる前

はわからない。死んだ後もわからない。

蟬と一緒にしょ。ということは人生その

ものもわかつていない。(中略)

人生の外へ超えた、そして人生の生と

死、裏と表を全部見抜いていかれた、

それがお釈迦さまだと思ふ。だから

我々は当たり前前のごことが当たり前でな

かった。非常の事を悟ると仰つた。そこ

から老・病・死を超えて行く、悟りへの

道を、お釈迦さまは自ら出家して悟り

の道を説いていかれた。それが仏教です。

生と死を丸ごと包んで乗り越えてい

く道、それが仏教なんです。それを

説くのは仏教だけです。世界の宗教

にキリスト教やイスラム教はあるけど、

そんなことは説きません。キリスト教で

は人間の生まれる前を説きません。死

んでからのことも天国と地獄ぐらいしか

説いていない。仏教は六道輪廻が説いて

ある。地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・

天にいたるまでの六道。これを説いてい

るのは仏教だけで、キリスト教やイスラ

ム教では説いていない。そんな世界があ

るのかないのかという前に、人間以外の

境涯を緻密に説いているのは仏教だけな

んです。誰が説いていますか。誰が否定

することができますか。そんな地獄の世

界なんてないわい、と言うている者が地

獄に墮ちるかもしれない。

ところが私たちが生死を超える。生死

流転、これを丸ごと超えて行く。超

えるということは浄土へ往生するとも、

涅槃とも、悟りを開くとも、仏に成る

ともいう。これが仏教である。

『人間に生まれた意味』(行信教校一味出版部)より引用

掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています



倫理道徳と宗教

本願寺派 勸学 内藤 知康

宗教というものは、やはり「私」を問題にするものであります。「私」を抜きにした宗教というものは存在しません。「私」がどういう存在であるのか、これが宗教では問題になってきます。

倫理道徳と宗教との違いについて、ある人はこういう言い方をします。何々すべきである、何々はしてはならない。これは倫理道徳だと。善はすべきである、悪はすべきではない。これが倫理道徳ですね。宗教とは「すべきである」ができない私、「してはならないこと」をしてしまう私、ここから出発するんだ。こういうふうにいわれた人がいます。

たとえばキリスト教にもそういう側面があります。イエスは元々、ユダヤ教のラビです。ラビとはユダヤ教の律法に非常に詳しい人のことです。(中

略) 律法では基本的には、盗つてはならない、殺してはならない、ということはいわれませんが、具体的なことまでを神が定めたわけではないので、律法をどう解釈していくかが問題になるわけです。

『旧約聖書』の中、ユダヤ教のルールでは、いわゆる姦淫の罪、今でいう不倫です。これを犯した女はみなから石を投げられて殺されるというルールがありました。

現代の視点からすると、どうして女性だけがという問題が出てきますけどね。ある女性の不倫が発覚して、みなで石を投げて殺そうとなつた時、イエスが通りかかったのです。イエスは律法の専門家ですから、みなはこれから石を投げて殺してもいいですよ、と確認を求めました。しかしイエスは黙っている。それでいいですよ、ともう一回確認をした時の、イエスの有名な言葉が、「罪なき者、まず石を投げうて」です。今まで何の罪も犯したことの無い人がまず最初に石を投げ

なさい。人の罪ばかり責めるのではなく自分の罪を考えると、こういわれたら誰も投げる事ができなくなつてしまった。そして結局その場には誰もいなくなつたという話が聖書の中に出てきます。

これも結局のところ、罪を犯してはならないという問題ではなくて、私が罪を犯した時に、罪しか犯せないような私は一体どうなつていくのかが問題であり、これがキリスト教の一つのテーマであります。神の愛によつて救われる、というように説かれたりもします。

「何々してはならない」「何々するべきだ」というのが倫理道徳なんだけれども、してはならないことをしてしまふ私、しなくてはならないことをできない私、そういう私

が一体どうなつていくのかということを考えていく、これが宗教の問題とするところであり、そのまま仏教で問題とするところでは、そこでは何より私自身が問題にされるわけです。

『阿弥陀仏と浄土』(法蔵館)より引用

掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています



雨の日には雨の日の生き方

兵庫県東光寺 元住職 東井 義雄

私が、校長になつてからのことで、す。どういふものか、遠足とか、運動会とか、学校が行事をする度に、雨が降りました。その中、とうとう「雨ふり校長」といわれるようになってしまいました。

定年を前に、最後の運動会を計画してもらつた前日、測候所が「風雨注意報」を出しました。私も素人が空を眺めてみても、当日は雨と思われました。しかし、当日になつてみないと天気はわかりません。予定通り、運動会ができるように、準備を進めてもらいました。その日、夕方近く、私は、速達郵便依頼のため、郵便局に出かけました。依頼し終つて、郵便局を出たと思つたら、学校の方から、マイクを通して声が響いて来まし

た。翌日の運動会の準備のすべてを終つ

た最高学年の子どもたちに、最高学年の担任でもあり、体育主任でもある米田啓祐先生が、話しているようでした。「もしも、明日、雨が降つても、決して

天に向かつて ブツブツいうな
雨の日には

雨の日の生き方がある」

私は、思わず、立ちどまつて、このことばを聞きました。町を歩いている皆さんの中にも、立ちどまつて、耳を傾けている人がありました。

ほんとうにそうだと思ひました。もし、雨が降つたら、明日を「雨が降つたおかげで、運動会はできなかつたけれども、こんないい日にすることができた」と言えるような一日にすることが大切なことです。

それを聞いていると、雨にならなければいいが…という、心の中の雲が、さつ

と破れて、晴々としてきました。

翌日は、測候所の予報を、全く裏切つて、すばらしい日本晴にしていた。私の教員生活の中の最後の運動会を、見事にやつてもらふことができました

が、おかげさまで、米田先生のことばが、私の忘れ得ぬことばになつてくれました。親鸞聖人がおっしゃっているように、決して「よい日」「わるい日」はないのです。

雨の日には雨の日の

病む日には病む日の
老の日には老いの日の
かけがえのない大切な人生がある

のです。どの日もどの日も、大切な日ばかりなのです。決して、決して、「ブツブツ」で汚してはならないのです。
※昭和六十三年三月末日までは、雨を伴う可能性のある強風に対して、風雨注意報を発表していたそうです。また、測候所は、現在は二ヶ所を除いて廃止され、特別地域気象観測所へ移行されています。 住職

『喜びの種をまこう』（柏樹社）より引用
この本は西照寺書庫にあります



「なんまんだぶ」の仏

本願寺派 勸学 梯 實圓

『蓮如上人御一代記聞書』に、

「証拠は南無阿弥陀仏なり」とあ

ります。私が救われる証拠はどこ

にあるかと言ったら、「証拠は南

無阿弥陀仏だ」と。その他に証拠

はない。南無阿弥陀仏そのものが

仏様であり、この南無阿弥陀仏そ

のものが浄土が顕現しているすがた

なのだ。だから南無阿弥陀仏が私

の救われるしるしであり、証である。

救われる証拠は南無阿弥陀仏だと

言うのです。

これは気をつけなくてはならない

のですが、我々は、「心がきれいに

なった」とか「有り難くなった」と

か、自分の心に救いの証拠を見よう

とするのです。お説教を聞いていた

ら涙が出てくるほどうれしかった。

それで自分は仏様にだいぶ近づいた

ように思うのです。しかしそんなもの

はどれだけ続くものか。一時間もすれ

ばケロッとなってしまう。いや、一時間

も持たないでしょう。そんな風に心は

変わるものです。有り難い心が悪いわ

けではありませんが、しかしそれはそ

のまま流してしまえばよい。

やかんでお湯を沸かす時にガスの上

にかけておいたら沸いてきます。けれども

ガスを切つてしばらくおいていたら冷め

てしまつて元の水になります。あれが地

金なのです。だからお話を聞いていれ

ばだいぶ沸く。沸くけれどもしばらく

したらまた冷える。だから沸いたから

といつて、これでよいと思うことはない。

冷えたからといつてこれでいけないとい

うわけでもない。冷えることも沸くこ

ともそれは私の行動の変化であるから、

救いの証、証拠をそんな所に見てはい

けない。南無阿弥陀仏が救いの証なの

です。だから私が覚えていようと忘れ

ていようと、有り難かろうと有り難か

るまいと、私を救つてくださることに間

違ひはないのだということでしょう。

讃岐に庄松というお同行がおりまし

た。ある時、友達と一緒ににお寺にお参

りする途中で、庄松さんが「ほい、忘

れた」と言った。「何を忘れた？」と友

達が尋ねたら、「信心忘れた」と答え

るのです。「信心忘れたつて、お前どう

するのだ」と言いましたら、庄松さんが、

「なんまんだぶ。なんまんだぶ。ああ、あつ

たあつた」と言ったそうです。そうなの

でしょう。「証拠は南無阿弥陀仏」、あつ

たあつたというわけです。(中略)

阿弥陀仏は、「立撮即行」の仏様です

から、「なんまんだぶ、なんまんだぶ」と言つ

た時に、「私を救いにここまで来てくだ

さつたのでございますか」と言つてお念仏

すればよいのです。それが阿弥陀様に

遇つたということなのです。

※立撮即行…立ちながら撮りてすなはち行く

『正信偈講座』(本願寺出版社)より引用

掲載文字数の関係で、一部を中略してご紹介しています



「私」という存在

筑紫女学園大学 元学長 小山 一行

私たちは普段、この広い世界の中に、さまざまのものが無関係に独立して存在していると思いがちです。また、自分は自分、他人は他人、どう生きて行こうが私の勝手だと考えてはいないでしょうか。しかし、よくよく考えてみれば、それは大きな心得違いだということに気づくでしょう。

私がこの世に生まれるためには、父と母とがいなければなりません。その父と母とのそれぞれにまた父と母がいたはずであり、その祖父と祖母にもまた……と考えて行けば、私という存在の背後に、無限のいのちのつながりがあったことがうなずけるでしょう。それは決して、「ご先祖さま」という範囲にとどまるものではありません。

生まれるとすぐに母乳を飲み、それから三度三度の食事の中であらゆる生き物の命をいただき、空気を吸って水を飲み、この身を育てられてきたのです。また、両親や家族、友人や周囲の人びとと交わりながら、人間としての心をはぐくまれて今日まで生きてきたのです。「私が生きている」と簡単に言いますが、「私」ということ自体、はかり知れない「縁」によって成り立っているのです。

あらかじめ親がいて、子を産むものではありません。子供が生まれた瞬間に、その人は親と呼ばれるのです。「親」と「子」は、双方の関係の中で成立しているものであり、「縁あつて」親子となつたとき、夫がいて妻をめとるのではありません。結婚した男女を「夫婦」というのですから、「縁あつて」夫婦となつた、しかいえないのです。「私」という存在は、

妻から見れば夫ですが、子供から見れば親であり、また私の親から見れば私は子供でもあるのです。とすれば、「私」という独立したものがはじめからあるのではなく、他のあらゆるものとの関係の総体を、仮に「私」と呼んでいるにすぎなかつたのです。

釈尊は、三十五歳の時、ブツダガヤの菩提樹の下で、この宇宙に存在する森羅万象のすべてが、大きなつながりのなかにあるという真理に目覚めて仏陀とられました。経典はその時の出来事を、

熱心に思惟する修行者に
あらゆるものごとの真相が明らかとなつたとき

かれの疑惑はことごとく消え去つた。
縁起の法を知つたからである。

(『ウダーナ』)

と記しています。

『新々みちしるべ しあわせ 福德』(仏教伝道協会)より引用
この本は西照寺書庫にあります